5. 中河與一「徳島のモラエス」とアルマンド・マルティンスの影響

── 日本の文学者におけるモラエス受容（4）──

河田和子

１、はじめに

ヴェンセスラウ・デ・モラエス（Wenceslau José de Sousa de Morais　1854 年 5 月 30 日～1929 年 7 月 1 日）[1]は、日本研究家のラフカディオ・ハーン（1850 年 6 月 27 日～1904〈明治 37〉年 9 月 26 日、Patrick Lafcadio Hearn)[2]やフランスの作家ピエール・ロチ（Pierre Loti 本名 Julien Viaud 1850 年 1 月 14 日～1923 年 6 月 10 日）[3]と比較されることも多い。彼らは直接顔を合わせることはなかったが、同じ時期に日本に滞在していた。日本ではハーンやロチと比べ、モラエスの著作が読まれることは少なかったが、それはその著作が故国向けにポルトガル語で書かれていたからでもある。

日本の文学者や文化人らがモラエスに注目するようになったのは没後、昭和 10〈1935〉年の七回忌法要が契機となっている。七回忌以降、モラエス顕彰において大きな役割を果たしたのがモラエス研究家・翻訳者の花野富蔵だった。昭和 44〈1969〉年に集英社から刊行された『定本モラエス全集』全五巻の翻訳者も花野である。彼のモラエス関連の著作（翻訳や紹介記事、評伝など）が日本の文学者のモラエス受容にどのように関わり、影響しているかについては、これまで拙論でも佐藤春夫や正宗白鳥、志賀直哉らを取り上げて検証してきた[4]。

一方、戦後来日した駐日ポルトガル大使でモラエス研究家でもあったアルマンド・マルティンス・ジャネイロ[5]（Armando Martins Janeira 1914 年 9 月 1 日～1988 年 7 月 19 日）の影響で、モラエスに関心を持った文学者もいる。伊藤整は、モラエスの原著を日本近代文学館に寄贈したマルティンス大使との交流について「ポルトガル大使館の話」（『朝日新聞ＰＲ版』昭和 43〈1968〉年 11 月 24 日）で述べている。マルティンスは『定本モラエス全集』刊行にも関わっており、日本におけるモラエス受容に貢献した点も見落とせない。特に中河與一が「徳島のモラエス──日本に帰化した一ポルトガル文人の生涯」（『自由』7(10)、自由社、昭和 40〈1965〉年 10 月、以下「徳島のモラエス」と記す）[6]を書いたのも、モラエスに言及したマルティンスの新聞記事（「日本を見た三つの目 ハーンとロチとモラエス」）が関係している。

「徳島のモラエス」には『徳島の盆踊り』が引用されているが、その邦訳は花野富蔵によるものではないし[7]、中河は花野のモラエス関連の著作を殆ど読んでなかったように思われる。その中河がモラエスに言及したマルティンスの新聞記事に触発されて「徳島のモラエス」を書いたのは興味深い。マルティンスのモラエス観に影響を受けたのはどういう点だったのだろうか。しかも、この作品には、徳島に隠棲していたモラエスを二度にわたっ

て訪問した話（実は架空の訪問譚）が記されている。そこで本稿では、日本の文学者におけるモラエス受容について検証するにあたり中河與一に焦点を当て、モラエスがどのように捉えられていたのか、ポルトガル駐日大使マルティンスの影響も視野に入れて考察する。

２、アルマンド・マルティンスのモラエス観

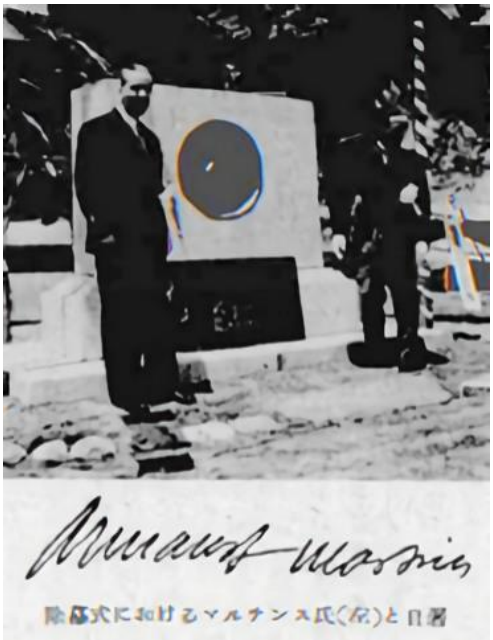
まず、「徳島のモラエス」冒頭でも触れられているアルマンド・マルティンスについて述べておく[8]。マルティンスは、1914 年ポルトガルのトラス・ウス・モンテス地方に生まれ、リスボン大学を卒業（法律学専攻）。昭和 27〈1952〉年～昭和 30〈1955〉年まで駐日ポルトガル代理公使、昭和 39〈1964〉年～昭和 46〈1971〉年まで駐日ポルトガル大使を務めた。その後、駐イタリア大使を務め、外交官の職を退いた後はリスボン大学で教鞭を取り、昭和 56〈1981〉年にはポルトガル日本友好協会を設立、両国の文化交流の橋渡しに尽力した。東洋と西洋の交渉史に関する比較研究、日本文学研究の碩学で、日本文化、能楽に強い関心を持ち、日本文学と西洋文学に関して論じた著作もある[9]。

モラエス研究家でもあるマルティンスは[10]、前述したように日ポ親善のため昭和 43〈1968〉年に本国からモラエスの原著初版本を手配して日本近代文学館に寄贈しており[11]、『定本モラエス全集』全五巻の編集委員としても名を連ねている[12]（第三巻の「解説」も執筆）。モラエス関連の著作で翻訳（日本で刊行）されているものとして、以下のようなものがある。

①アルマンド・マルチンス「モラーエスの徳島」(『読書春秋』5(9)、春秋社、昭和 29〈1954〉年 9 月）※訳はポルトガル大使館職員の緑川高廣
②アルマンド・マルティンス・ジャネイロ「日本を見た三つの目 ハーンとロチとモラエス」（上）・(下)（『朝日新聞』昭和 40〈1965〉年 2 月 1 ～2 日夕刊）
③アルマンド・マルティンス／野々山ミナ子訳「モライスと仏教」（上）・(下)
(『朝日新聞』昭和 40〈1965〉年 9 月 9～10 日夕刊)
④アルマンド・マルティンス／平野孝国訳「ポルトガルの日本理解者 ヴィンセスラオ・デ・モライス」(『国学院大学日本文化研究所紀要』17、昭和 40〈1965〉年 11 月）
⑤アルマンド・マルティンス／野々山ミナ子訳「モライスと佛教」（唐木順三編『明治文学全集 49 ベルツ、モース、モラエス、ケーベル、ウォシュバン集』(筑摩書房、昭和 43〈1968〉年 4 月) ※③の『朝日新聞』に掲載されたものを再録
⑥花野富蔵訳『定本モラエス全集III』（集英社、昭和 44〈1969〉年 6 月）の「解説」
Ａ・マルチンス／緑川高廣訳
⑦アルマンド・マルティンス・ジャネイロ／野々山ミナ子・平野孝国共訳
『夜明けのしらべ　モラエス・その生涯と作品』(五月書房、昭和 44〈1969〉年 12 月)
⑧アルマンド・マルチンス・ジャネイロ／植野豊治訳「日本人とモラエス」（徳島のモラエス編集委員会編『徳島のモラエス』徳島市中央公民館、昭和 47〈1972〉年 3 月〉

昭和 29〈1954〉年、モラエス没後 25 年にあたり徳島にモラエスの記念碑が建立された際、その除幕式が 7 月 1 日に行われ、マルティンス大使は主賓として参加した。「モラーエスの徳島」はその記念碑除幕式に参加した時の感慨を記したものである[13]。マルティンスは、モラエスが徳島に隠棲したその当時を偲び、「モラーエスの徳島に何が残つているか」「彼の孤独の悲劇を理解できるだろうか」[14]と考え、次のように述べていた。

> モラーエスは物質主義や工業主義のヨーロッパから日本へ逃避した人である。実利主義や科学万能主義が詩の世界を毒し、静かに精神的生活を楽しむ事が許されなかつたからである。ユーゴやバイロンの浪漫主義の流れをくむ彼には耐えられなかたのである。そして、この徳島の町でその夢を育くむことになつた。（略）ヨーロッパの思想は彼に安定感を与える事が出来なかつた。（略）この原子力時代に至つてうろたえはじめている。モラーエスはその最初の犠牲者であつたかもしれない。彼の頭は懐疑的で、虚無感を帯び、多くの経験を重ね、異性を愛し、世界を旅行した。（略）モラーエスの求めていた哲理はここにあつた。即ち精神の平和であり、惑わず死を迎える事である。これらの思想は西欧においては生活との繋がりを持たないが、この小都市にあつては日常の明け暮れに必須の感覚であつた。（略）モラーエスは西欧で得られなかつた幸福をここに築き、彼の一生が蘇つたのである（傍線は引用者、以下同様）[15]。



写真：『読書春秋』（昭和 29〈1954〉年 9 月）3 頁

マルティンスは、フランスの作家ヴィクトル・ユゴーやイギリスの詩人ジョージ・ゴードン・バイロンなどヨーロッパ浪漫主義の流れをひく作家としてモラエスを捉えていた。「物質主義や工業主義のヨーロッパから日本へ逃避し」て精神的生活を楽しもうとして徳島に住み着いたという文明批判的な見方は、マルティンス自身の考えを反映している所でもある。「日本を見た三つの目　ハーンとロチとモラエス」(下)（『朝日新聞』昭和 40〈1965〉年 2 月 2 日夕刊）でも、ピエール・ロチやラフカディオ・ハーンと比較しながら、モラエスについて次のように述べていた。

> 長年にわたって日本人の習慣を真似し、新しい動作を日ごとくりかえし、ヨーロッパ的生活を捨て去ったモラエスは変容していった。（略）彼は日本人に似て来た。（略）あらゆる事物と生物が一つに融け合った調和の中にすべてのナゾが解決される意義に

満ちた激しい内的生活の中に閉じこもった人となった。彼は魂をとりかえたわけではないが、たえず異った習慣にならい、精神と感受性を異質の文明の糧で養い、日本的空気の中に深く入りこむ中にその人の人格は著しく変った。（略）三十年の間にとげた変容ののち、彼は遠くから自分をひきつけながらも決して上陸することのできない島のために自分の島をすてた航海者のように、二つの文明の間に難破した。彼は日本人だと思っていたが、（略）終始外国人として扱われた[16]。

引用の都合で省略した部分もあるが、前半の「長年にわたって」の一文から「激しい内的生活の中に閉じこもった人となった」まで、中河の「徳島のモラエス」でも引用されている。モラエスは故国を捨て、「日本的空気の中に深く入りこむ」ことで日本人に似てきたが、言語の壁もあり外国人として扱われた。日本人の内的生活に同化しようとしながら日本人にはなりきれなかったことで、「二つの文明の間に難破した」「航海者」にたとえられている。「人生の終局において、夢からさめ、病身で困窮していたモラエスはおのれの誤ちに気づいたかもしれぬ」が、「彼はたえずかわらぬ愛情を日本に対していだき続けた」[17]ことで、マルティンスは日本への偏見を捨てなかったロチや晩年日本に幻滅して嫌悪や不快の念を表したハーンよりもモラエスを高く評価していた。

さらに、「モライスと仏教」（『朝日新聞』昭和 40〈1965〉年 9 月 9～10 日夕刊)で、モラエスと仏教との関わりに言及していたが、同記事には「西欧的思考との融和　日本の空気にひかれる」という見出しも付いていた。ここでいう融和とは、モラエスが「日本的空気にひかれて」「感傷的仏教とポルトガル的懐古主義の混合を促し発展させた」形の「追慕の信仰」[18]を持ったことを指す。「徳島のモラエス」発表前のものであり、中河はこの記事も読んでいたに違いない。

（5）　昭和40年9月9日　木曜日

モライスと仏教

<1>

――アルマンド・マルティンス

西欧的思考との融和

日本の空気にひかれる

晩年のモライス

マルティンスは、モラエス自身「ヨーロッパ的生活」から離れ、「日本的空気」、即ち日本人の習慣や精神、感受性の中に深く入りこんで日本人になろうと努めたものの、周囲から外国人扱いされていたし、言語の壁もあって結局日本人になれなかったと見ていた。そうしたマルティンスのモラエス観に感化されて、中河は「徳島のモラエス」を書いたのである。そこで「徳島のモラエス」において、どのようにモラエスが捉えられているのかを検証したいが、その前にこの作品を書いた中河自身の問題を踏まえておく必要がある。

３、中河與一の経歴と「徳島のモラエス」の背景

中河與一はどのような文学者だったのか、「徳島のモラエス」を考察する上で前提となる事柄もあるだけにその経歴を整理し[19]、作品が書かれた背景について確認しておきたい。中河與一（明治 30〈1897〉年 2 月 28 日～平成 6〈1994〉年 12 月 12 日）は小説家で歌人、出生は東京だが、戸籍上は香川県坂出町（現・坂出市）である。父・与吉郎は医師で、與一誕生の二年後、郷里の香川県に戻って坂出病院を開設、幼少期を坂出で過ごした。日露戦争中父親は軍医として従軍したため母方の郷里・岡山県赤磐郡に移り住み、小学校卒業まで祖父母のもとで過ごした。大正 7〈1918〉年に上京して翌年早稲田大学予科文学部に入学し（22 歳）、在学中の大正 9〈1920〉年に同郷の紙問屋を営む林卯吉の娘・幹子（歌人、国文学者。当時津田女子英学塾に在学）と学生結婚した。だが、以前から悩まされていた潔癖症とノイローゼが酷くなり、大正 11〈1922〉年に早稲田大学を中途退学した。

中河は当初画家志望だったが、18 歳頃から小説や短歌を投稿し、大正 10〈1921〉年 6 月に「悩ましき妄想」を発表（『新公論』に掲載、のち「赤い薔薇」に解題）、デビュー作となる。文壇の評価を得たのは『文芸春秋』大正 12〈1923〉年 5 月に発表した「或る新婚者」(のち「新婚者」に改題)で、同郷の菊池寛に認められて『文芸春秋』同人に加わり、翌 13〈1924〉年 10 月、川端康成、横光利一、今東光ら 14 名で同人誌『文芸時代』を創刊。横光、川端らとともに新感覚派文学の一翼を担う作家として注目された。

大正末から昭和初年代、中河はモダニズムの色彩が強い作品を発表し、プロレタリア文学陣営に対抗した反マルクス主義の評論も発表していた。その後、次第に叙情的傾向を強め、『日本浪曼派』の同人として「民族文化主義」（『日本浪曼派』昭和 12〈1937〉年 3 月）を発表、日本の伝統、民族文化を重んじた日本的な文芸を志す方向に傾斜していく。

戦後の代表作に『失楽の庭』（中央公論社、昭和 25〈1950〉年 10 月）や『悲劇の季節』（河出書房、昭和 27〈1952〉年 12 月）があり、昭和 13〈1938〉年に発表された『天の夕顔』とともに中河の三部作とされる。『天の夕顔』は、かなわぬ純愛を貫く男の話であり、戦前は注目されなかったものの（永井荷風からは激賞された）、戦後、六カ国語に翻訳され、浪漫主義文学の名作とされてベストセラーとなった。しかし、それとは裏腹に戦後の文壇において中河は孤立を余儀なくされていた。

写真:『中河與一全集』第 6 巻（角川書店、昭和 41〈1966〉年 12 月）口絵（昭和 36〈1961〉年　朝日新聞社撮影）

敗戦期、戦争協力作家として非難されたのは中河に限らないが、連合国軍最高司令官総司令部（ＧＨＱ)による公職追放の通知を受け、その解除後も中河は文壇や出版界において排斥されるような不遇な扱いを受けていた。それは中河にブラック・リスト疑惑があったことが関係している。太平洋戦争中、中河は内閣情報局に文学者のブラック・リストを提出して言論統制に手を貸した作家だという噂が囁かれ、誹謗中傷された。実際にはそうしたものはなく、自分達の戦争協力行為を隠蔽するために中河に濡れ衣をきせたデマだったとされるが[20]、妻・中河幹子「彼との生活」（『中河與一全集月報 第 9 号』角川書店、昭和 42〈1967〉年 6 月）によれば「彼の名前はどんな教科書からも全部締め出され、文学年表からさへも多く抹殺せられ」「それは今もつづいて」いたという[21]。「徳島のモラエス」では、モラエスの晩年の孤独が「私」の視点から捉えられているのだが、そこに中河自身の孤独も反映されているように考えられる。

この「徳島のモラエス」を執筆したのは昭和 40〈1965〉年、中河が 68 歳の時である。「モラエスが死ぬ少し前、彼を二度徳島に訪ねたことがあったので、その新聞記事（引用者注、マルティンスの「日本を見た三つの目」）は特別な感動をもって私を囚えた」と書かれている[22]。そして、大正 12〈1923〉年の夏と翌年の夏、二度徳島のモラエスを訪ねた時のエピソードが述べられている。しかし、実際に中河は生前のモラエスに会いに行ったのかどうか。大正 12〈1923〉年前後の中河の状況からみてそれは考えにくい。

というのも、その時期、中河はノイローゼ的症状と潔癖症（消毒癖）に悩まされていたからである。それが原因で早稲田大学も中退したのだが、その発端は大正 5〈1916〉年に遡り、母方の美しい従妹に告白して失恋したことが関係している。特にその従妹が後にコレラで病死したことを知って大きな衝撃を受け、潔癖症の症状が悪化した[23]。医者だった父親の診察室から昇汞水（消毒薬）を無断で持ち出し、不潔と感じた時に消毒して気持ちを落ち着けようとしたことも自伝『天の夕顔前後』（古川書房、昭和 61〈1986〉年 6 月）で述べられている[24]。結婚はしたが潔癖症は昭和 2〈1927〉年まで続き、交友に支障をきたすことも少なくなかった。そうした中河が消息不明だった徳島のモラエスの家を友人と探訪し、翌年また一人で訪れるというのは無理だろう（『天の夕顔前後』にもモラエスのことは書かれていない)。この作品自体エッセイ風に書かれているが、中河は実際にモラエスを訪ねたことはなく[25]、架空の訪問譚を創作したのだと考えられる[26]。

それならば、なぜ中河は「徳島のモラエス」で架空のモラエス訪問譚を書いたのだろうか。架空の訪問譚を書くにあたりどのように虚構、創作されているのかも問題になる。そこで「徳島のモラエス」でどのように架空の訪問譚が創作され、「私」の視点からどのようにモラエスが捉えられているのかを見ていく。

４、架空のモラエス訪問譚と東京外国語学校の学生による訪問記

まず「徳島のモラエス」の構成について述べておく。この作品には「孤独のなかで自殺」「ポルトガルのハーン」「日本の自然を愛す」「二人の女性をめぐって」「モラエスを訪ねて」

「文人の多感な晩年」「死後」という七つの見出しが付けられている。前半の四章で、モラエスの生涯についてその経歴や著作、彼の愛妻お米と小春について述べられている。後半、「モラエスを訪ねて」と「文人の多感な晩年」でモラエスの自宅を二度訪れた時の様子が回想されており、最後の「死後」で過失死か自死か曖昧なモラエスの死と彼の遺書や遺産の事が述べられている。エッセイ風に一人称の「私」で書かれているだけに、「モラエスを訪ねて」と「文人の多感な晩年」で述べられている回想話が、実は架空の訪問譚であることに気づきにくい。

エッセイ風の作品に架空の話（「私」の記憶自体作り話）が挿入されているのだが、モラエスの家を初めて訪ねた時の描写に注目したい。大正 12〈1923〉年の夏、「東京外国語学校」のポルトガル語教師ピント氏の教え子で、ポルトガル語専門の友人と一緒に訪問した時の様子が記されている。訪問の経緯も次のように詳細に書かれている。

> ポルトガル語専門の私の友人は此のピント氏からモラエスのことをきいて、その頃の私にいちいち教えてくれていたのであるが、（略）私はその頃、折があったらモラエスの消息をもっと探索したいと思っていた。／大正十二年、モラエスが徳島に引籠ってから丁度九年目の夏、今から勘定すると四十三年前であるが、閲点呼で帰国する途中、徳島に行くことにした。私は生死不明のモラエスの消息をこの機会に探しだそうと決心して、私の友人と一緒に徳島にたちよった。（略）やっと探しあてたのは棟の低い古い二階建の長屋であった。それは附近の粗末などの借家よりもみずぼらしく、（略）平屋としか思えないような低い家であった。（略）私はあらためてあたりを見廻した。「徳島の盆踊り（ボンオドリ・エン・トクシマ）」の中でよんだ景色が一瞬間、映画のように目の前を横切って消えた。（略）私が遠慮がちに幾度となくノックすると、大儀らしいノロい気配がして人が木戸口に近づいて来た。（略）老爺は怪訝そうに私をじっと凝視した。友人は小腰をかがめると暗誦するように固くなってポルトガル語で言った。
> 「今日は、私は東京外国語学校のポルトガル語を学ぶ……」
> 言いかけて彼は中途で言葉を切らなければならか（ママ）った。
> 「ほお……」
> 低い、恐ろしく感動的な声が老人の喉からかすれて出た[27]。

初対面のモラエスの様子が鮮明に描かれている。そこで想起したいのは、大正 12〈1923〉年の夏、徳島にいるモラエスの消息を探索して、モラエスの自宅を訪れた東京外国語学校の学生に安部六郎（後の姓は入江）がおり[28]、彼もモラエス訪問記を書いていたことである。岡本多希子「戦前におけるモラエス顕彰」[29]で言及されているように、東京外国語学校のポルトガル人教師ピントは、ポルトガル語学科の学生達にモラエスの人と作品について語ったが、モラエスがどこに住んでいるのかは不明だった。モラエスに多大な関心を持った教え子たちの一人、安部六郎（徳島出身）は、郷里に帰った折にモラエスの住居を探し出し、

大正 12〈1923〉年 8 月 16 日にモラエスの自宅を訪ねた。その後、同年 12 月 28 日には安部の同級生である上野忠夫もモラエスを訪問している。

安部六郎はポルトガル語でモラエスを訪問した時のことを書いており、彼の訪問記（Uma Visita ao Sr. Wenceslau de Morais）はポルトガルの有力な研究誌 Lusitânia に掲載され、『東京外国語学校葡萄牙語同学会 会報』第 3 号（大正 14〈1925〉年）にもポルトガル語のまま転載された[30]。その後、モラエス七回忌に際して、安部自身邦訳した「ヴエンセスラウ・デ・モラエス訪問記」が『徳島毎日新聞』昭和 10〈1935〉年 7 月 1 日の記事として載った。その訪問記を見ると、訪問時のやりとりなど「徳島のモラエス」と似た所がある。

特に「ヴエンセスラウ・デ・モラエス訪問記」の以下の記述は、「徳島のモラエス」の前の引用で、モラエスの家の木戸をノックし、友人が東京外国語学校の学生であることを名乗った際のモラエスの反応と近似している。

> 私は一九二三年（大正十二年）八月十六日の朝堅く閉ざされた此家の戸口でノックしてゐた。／と、屋内に足音が聞えて白髯の老人が現れた。これぞ会ひたかつたモラエス其人であつた。／私は葡萄牙語で「東京外国語学校の生徒」と云ふと未だ戸を開けぬ先に彼は叫んだ。
>
> あゝ!!（「ヴエンセスラウ・デ・モラエス訪問記」[31]、以下「モラエス訪問記」と略記）

このように安部の「モラエス訪問記」と類似した所があるのだが、中河の「徳島のモラエス」との大きな相違がある。それは安部が友達連れでなく、一人でモラエスを訪ねた点である。安部が一人でモラエスを訪問していたことは、モラエスが友人のアルフレッド・エルネスト・ディアス・ブランコに宛てた私信（1924 年 1 月 16 日付の追伸）の中で、次のように書いていたことからも確認できる。

> 東京に官立の「外国語学校」がある。（略）ピントという青年がポルトガル語の教師になっている。これは三万人以上もあろうというブラジル移民のせいだ。去年の夏期休暇に、そこの学生のひとりがここをつきとめて僕を訪問し、（略）その学校で、僕の名を知ったと言った。青天霹靂だった！（略）数日前の去年の暮、こんどは冬期休暇に同じ学校の他の学生が面会を求めてきた。この学生は、友人がリスボンで買った『盆踊』を一部持参していた。（『おそろし ― 私信集 ― 』私信九六[32]）

この私信に記されている東京外国語学校の学生で、夏期休暇に訪問したのが安部六郎、冬期休暇に訪れた学生が上野忠夫であり、いずれも一人で面会している。つまり、「徳島のモラエス」に記されたように、中河が友人と二人でモラエスを訪ねたという事実はなく（中河はモラエスの家を訪れてはおらず）、「私」がモラエスに会ったというのはやはり架空の話、フィクションということになる。

ただし、「徳島のモラエス」作中で引用されている「徳島の盆踊り（ボンオドリ・エン・トクシマ）」の邦訳の出典について留意したい。ポルトガル語の原著であることを示すため「ボンオドリ・エン・トクシマ」とカタカナのルビが振られており、本文の一節が邦訳で引用されている。その引用はヴェンセスラウ、デ、モラエス／上野忠夫抄訳「徳島の盆踊」（『東京外国語学校葡萄牙語同学会 会報』2、大正 13〈1924〉年 2 月、以下『会報』と略記）に拠るものである。次のように、「徳島のモラエス」に出てくる「徳島の盆踊り」の邦訳の一節は（波線で示したように表現が少しだけ違う所もあるが）、上野の抄訳と殆ど一致しており、同訳から引用したものであることは明らかである[33]（以下の引用部分は、モラエスが徳島に来た時の第一印象を述べたくだりであり、「徳島のモラエス」の作中では、樹木の緑など自然に対するモラエスの感受性の強さを示す例として引用されている）。

> 緑！ それは私の恍惚とした瞳孔に射るように入って来た。それは私の敏感な鼻孔へ射るように吸い込まれた。緑！ 緑！ 外に何もない。／それは余りに威圧的な印象であった。外に何事も考える余裕すらなかった。私の前方に展開している景色の微細な点など注意する余裕もなかった。色彩と匂いによる酩酊とでも言おうか。言葉をもってしては私の感じを写しだすことは出来ない。（「徳島のモラエス」[34]）

> 緑！ それは私の恍惚とした瞳孔へ射るやうに這入つた。それは私の敏感な鼻孔へ射るやうに吸ひ込まれた。緑、緑！ 外に何もない。餘りに威圧的な印象であつた。外に何事も考へる余裕すらなかつた。私の前方に展開してゐた景色の細い臭まで注意する余裕がなかつた。色彩と匂ひによる酩酊とでも云はうか、併し言葉を以つて私の感じたことを写すことは出来ない。(上野忠夫 抄訳「徳島の盆踊」[35])

先のディアス・ブランコ宛ての私信で、冬期休暇でやって来た学生(上野忠夫）は面会時、「友人がリスボンで買った『盆踊』を一部持参していた」（前出）と書いている。「徳島のモラエス」でも、「「徳島の盆踊り（ボンオドリ・エン・トクシマ）」の中でよんだ景色が一瞬間、映画のように目の前を横切って消えた」（前出）と書かれていることから、上野が『徳島の盆踊』の原書を持っていたことを知っており、こうした場面を描いたのだろう。上野自身、抄訳を発表した『会報』の「編集後記」で、モラエスを訪問した時のことを述べており、「独り自然を相手とし、家畜を友として丁度氏がその著書「徳島の盆踊」に云つてゐると同じ生活をし（ママ）居られる。相語ること五時間位に及んだらう」[36]と述べている。中河がどのようにして東京外国語学校葡萄牙語同学会の『会報』（第 2 号）を入手したのかは不明だが、同号に掲載された上野の抄訳と「編集後記」の文章を読んでいたことは間違いない。上野はその「編集後記」で、「昨年の夏学友安部君が簡閲点呼でその郷里なる徳島へ行かれた際、久しく尋ねてゐたモラエス翁の住所を見出して来られたのは私にとつて大なる欣びであつた」[37]と書いており、安部がモラエスの家を探索したことにも触れている。

以上のことから、「徳島のモラエス」で「私」が二度徳島のモラエスに会いに行ったという回想話は事実ではないが、実際にモラエスを訪問した東京外国語学校の学生として安部六郎と上野忠夫がおり、その情報を同学校の『会報』などから得ていたと考えられる。中河は、安部と上野の体験を交えた形で自らモラエスを訪問したような架空の話を仮想し、創作したのではないか。中河と安部、上野との間に交友関係があったのかは未詳だが、彼らと面識はなくても知人に東京外国語学校の関係者がいれば情報も得やすいだろう。『徳島毎日新聞』に載った安部の「モラエス訪問記」を読んでいた可能性もなくはない[38]。

上野忠夫が書いた『会報』の「編輯後記」によれば、五時間に及んでモラエスと話をしたらしいが、どんな話をしたのかそれほど詳しくは記されていない（葡萄牙語同学会のことを語り、モラエスに寄稿を依頼したことが述べられている）。「私」の二度目の訪問は、上野の訪問時期（大正 12〈1923〉年 12 月 28 日）から半年以上ずれて大正 13〈1924〉年の夏になっているし、中河によって殆ど空想、創作された話と見られる。二度目の訪問でモラエスがどう捉えられているのか、一度目の時の「私」のモラエスに対する印象、捉え方と合わせて検討したい。それによって中河はなぜこうした架空のモラエス訪問譚を書いたのか、その創作意図も見えてくる。

５、二度目のモラエス訪問と多感な文人

二度目のモラエス訪問が書かれている章の見出しは「文人の多感な晩年」であるが、中河はモラエスを「東洋」的な精神生活を求めた「文人」として捉えている。「日本の自然を愛す」の章でも、「ポルトガルの都会に育ち、（略）再び都会の喧騒と黄塵の中へ帰った彼は、昔の東洋人のような隠遁生活を欲したところもあったにちがいない」とあり[39]、都会的喧騒から逃れて昔の東洋人のような隠遁生活を求めた「文人」として「私」はモラエスを見ている。「昔の東洋人」とは、『徳島の盆踊り』で言及されている『徒然草』の吉田兼好や『方丈記』の鴨長明らを指していよう。しかし、「私」がモラエスに会って垣間見たその生活は昔の文人のような風流なものではなく、その住処は随分みずぼらしかった。一度目の訪問の後、「私は正直呪われていい古い文人気質というものに、同情と一味の嫌悪を感じていた」のも、「モラエスの生活は憂鬱と沈滞そのもの」[40]であったからである。

しかし、モラエスの所へ再度、しかも一人で訪ねたのだから「私」は彼に親近感を持っていたのだろう。二度目の訪問で、「私」はモラエスと一緒に街を散歩し、レストランで夕食をごちそうになる。モラエスは自宅に戻って「私」の為に酔い覚めの水を取りにいった際、体のバランスを失い畳に倒れてしまう。「クリスタル・メンゾール」（製油の結晶）を嗅いで気持ちを落ち着かせようとするモラエスの姿を見ていた「私」は、彼と別れた後、次のような不安を感じている。

> この多感な文人の晩年――貧乏と孤独と病気とに悩まされながら死を待っているモラエスのことを考えると、自分の胸の中まで不安の黒い色で染まる気持ちであった。／

私は何ということなくモラエスの最後を眼の前に見たような気がした。そして不吉な予感を払いのけるようにその辺のバーに入るともう一度強い酒を飲んだ[41]。

この時の「私」の「不吉な予感」は、モラエスの最期、即ち昭和4〈1929〉年7月1日の過失死か自死か曖昧なモラエスの死を想起させる形で書かれている。そして、「死後」の章では、「日本を愛し、日本人になろうとして努力した一人の異国の文人は、余りにも淋しく何に報いられることもなく、日本の辺土で死んで行った」[42]として、日本人になりきれなかった異国の文人の寂寥、晩年の孤独なさまが捉えられている。

注意したいのは、「私」の視点からモラエスが「多感な文人」として捉えられている点である。「徳島の盆踊り」の一節で、樹木の緑に対するモラエスの感受性の強さ、視覚、嗅覚の鋭敏さがうかがえるくだりが作中に引用されているが（前出）、それは「モラエスの多感な人柄」[43]を示す例として挙げられている。そうしたモラエスの多感な側面は、自然を愛して昔の東洋人のような隠遁生活を欲した点と繋がっており、「徳島の盆踊り」等の著作に活きている。けれども、一方で多感なポルトガルの文人であったから日本人になろうと努めながら結局なりきれず、その孤独で淋しい晩年の生活を「私」は目の当たりにしていた。

このように「徳島のモラエス」では、多感な文人の孤独、寂寥感が「私」の視点から捉えられている[44]。中河がこうした架空の訪問譚を書いたのは、執筆当時の中河の見方や孤独な心理も反映していると考えられる。前述したように、この時期、中河は文壇から孤立を余儀なくされていた。ブラック・リスト疑惑など誹謗中傷があり、後年のエッセイ「孤独地獄から」(『孤独地獄』新生社、昭和57〈1982〉年12月）でも「外界との交渉をなるべく少なくして生きるやうにして来た」ものの「何時の間にか孤独地獄に陥入つてゐたといふことは、自業自得と云はねばならぬ」と書いている[45]。「私」がモラエスに垣間見た文人の孤独は、外界との交渉を少なくしていた中河の孤独も投影していたと考えられる。

中河が架空のモラエス訪問譚を書いたのは、大正12〈1923〉年時69歳（執筆時の中河より一歳上）のモラエスに会っていたらどのような思いを抱くかを想像し、ポルトガルの一文人の生涯と晩年の孤独に思いを馳せたのだろう。自らも抱える文人としての孤独を見据えることで自己相対化をはかろうしたのだと考える。

６、中河とマルティンスのモラエス観

本稿では、中河與一の「徳島のモラエス」において、モラエスがどのように捉えられていたのか、ポルトガル駐日大使マルティンスの影響も視野に入れて検討してきた。ここではモラエス受容の問題として考察してきたことを整理しながらまとめたい。

「徳島のモラエス」では、40年以上前の記憶をもとに「私」が二度モラエスを訪れた話が記されている。だが、中河自身モラエスの自宅を訪ねたことはなく架空の話である。ただし、実際にモラエスを訪問した東京外国語学校の学生として安部六郎と上野忠夫がおり、その情報を同学校の『会報』などから得て、架空のモラエス訪問譚を創作したと考えられ

る。中河は架空のモラエス訪問譚を書くことで、ヨーロッパ的生活を捨てて日本人になろうと努めながら日本人にはなりきれなかったモラエスの晩年の孤独と寂寥感を訪問者の「私」の視点から捉えようとしたのである。そこには執筆当時の中河の孤独も反映されており、モラエスは多感な文人として捉えられている。

中河が「徳島のモラエス」を書いたのは、モラエスについて言及したマルティンスの新聞記事に触発されてのことである。中河がマルティンスの言説から影響を受けたのは、ヨーロッパ的生活を捨てて「日本的空気」、即ち日本人の精神や感受性の中に深く入りこんで日本人になろうとしたが、言葉の壁もあり、日本人になりきれなかったというそのモラエス観にある。マルティンスは「日本を見た三つの目」（前出）で、日本とヨーロッパ（ポルトガル）の二つの文明に難破した航海者としてモラエスを捉えていた。そうした捉え方をしたのも、マルティンス自身、東洋と西洋の二つの文明の間に壁があることを意識していたからである。『夜明けのしらべ　モラエス・その生涯と作品』（前出）でも「モラエスの仕事で、並外れて価値あると思われることは、東洋人と西洋人を分ける人間感情と思想の壁について、鋭敏な意識を持った」点だと述べている[46]。

つまり、マルティンスは東洋と西洋の問題に関わる文明批判的視点からモラエスを捉えていたのだが、中河がマルティンスのモラエス観に感化されたのはその点も関係していると考えられる。中河自身、戦前から日本と西洋の関係を意識していたし、戦後「近代はもう終つた」（『日本経済新聞』昭和 33〈1958〉年 1 月 10 日）という評論も書いていた[47]。「徳島のモラエス」を書く前から合理主義的文明の行き詰まりを認識していて、「昔の東洋人のような隠遁生活」（「徳島のモラエス」前出）を求めた「文人」としてモラエスを捉えていた。それはマルティンスが「物質主義や工業主義のヨーロッパから日本へ逃避した人」（「モラーエスの徳島」前出）としてモラエスを捉えていた見方とも通底する。

しかし、中河はマルティンスの影響をうけながら、そのモラエス観とは異なる点もある。マルティンスは東洋と西洋の文明の壁を意識しつつも、モラエスの中に融和的な思考がある点を見いだしていた。「モライスと仏教」で、モラエスに見られる「追慕の信仰」が、ポルトガル的懐古主義と日本の感傷的仏教とを混合、融和させたものだと解していたことは前述したとおりである。モラエスに融和的思考を見ようとした事自体、日ポ親善に努めたマルティンスの立場も反映されているだろう。一方、「徳島のモラエス」において、周囲の住民から嘲笑や軽蔑にあっても寛容な態度を取るモラエスは「善良な性格」[48]で、感受性の鋭い多感な文人として捉えられているが、ポルトガルと日本を結びつけるような融和的な側面をモラエスに見てはいない。多感な文人の晩年の孤独を捉えるにあたり、中河自身抱えていた孤独を投影している所もある。

このように、中河與一の「徳島のモラエス」をもとにモラエスの受容のありようを検討してきた。モラエスがどう捉えられてきたか、そこには各々の作家の立場、作風も反映されている。多感な文人としてモラエスを捉えたのも、中河のロマン主義的な感性と繋がっていると考えられるのだが、その点に関しての検証はまた別の機会に譲りたい。

[1] モラエスは、海軍士官から外交官に転身して明治 32〈1899〉年神戸大阪ポルトガル領事の任を受け神戸に移住した。芸妓・福本ヨネと結婚したが先立たれ、愛妻の郷里・徳島に造った墓を見に行ったことがきっかけで日本永住を決めて領事の職を辞し、大正 2〈1913〉年に徳島に隠棲した。ポルトガル領事の職に就く前から『極東遊記』(Traços de Extremo Oriente.1895 年）『大日本』（Dai-Nippon.1897 年）などアジア、日本に関する著作を発表し、日本移住後も文筆活動は続けられた。

[2] ギリシャ生まれ（国籍：イギリス）の新聞記者、英語教師、英文学者、随筆家。渡米して新聞記者になったが、日本文化に関心を持ち 1890 年に来日。松江の中学校に英語教師として赴任し小泉セツと結婚した。明治 29〈1896〉年に帰化して小泉八雲と名乗り、東京帝国大学の講師も務めた。主な著作は『知られざる日本の面影』『怪談』（原著は英語）等がある。

[3] 海軍士官として軍艦に搭乗して世界各地を歴訪し、寄港地での体験をもとに小説や紀行文を発表した。日本には二度、1885 年と 1900 年暮れから 1901 年にかけて滞在。『お菊さん』（Madame Chrysanthème.1887 年）等を発表した。

[4] 拙論「戦前のモラエス受容における花野富蔵と佐藤春夫 ― 日本の文学者におけるモラエス受容(2） ―」(『令和 3 年度総合科学部創生研究 プロジェクト経費・地域創生総合科学推進経費報告書 異文化に照らし出された四国 ～「グローカル」な観点からの文献調査から～』令和 4〈2022〉年 3 月、徳島大学総合科学部）、「モラエス受容における正宗白鳥と志賀直哉 ― 日本の文学者におけるモラエス受容(3) ―」(『令和 4 年度総合科学部創生研究 プロジェクト経費・ 地域創生総合科学推進経費報告書 異文化に照らし出された四国～地域における外国人受容の意義についての歴史的考察～』令和 5〈2023〉年 3 月、徳島大学総合科学部）。

[5] 本稿では基本的にマルティンス、ジャネイロと表記するが、「マルチンス」「ジャネイラ」と表記されることもあり、必要に応じて元の資料の表記で示す。

[6] 中河がモラエスについて言及したものは、管見では「徳島のモラエス」だけである。中河の自伝『天の夕顔前後』（古川書房、昭和 61〈1986〉年 6 月）収録の「中河与一年譜」(佐藤悦郎)には「昭和四〇年（一九六五）六八歳」の事項として「七月、「ブエンセンスラウ・モラエス」を「自由」に発表」（292 頁）とあるが、同雑誌に該当記事はない。掲載予定が 10 月にずれ、標題も「徳島のモラエス」と変更されて発表されたものと思われる。なお、本稿では基本的に「與一」と表記するが、「与一」と表記されている資料もあるので、出典や標題など必要に応じて元の資料の表記に従う。

[7] 花野富蔵訳『徳島の盆踊』(原著 O"Bon-odori" em Tokushima.1916 年）は第一書房から昭和 10〈1935〉年 9 月に刊行されている。

[8] マルティンスの経歴については、アルマンド・マルティンス・ジャネイラ／松尾多希子訳『南蛮文化渡来記――日本に与えたポルトガルの衝撃』(サイマル出版会、昭和 46〈1971〉年 12 月)に付された「著者紹介」や日外アソシエーツ編集部編『20 世紀西洋人名事典』（日外アソシエーツ、平成 7〈1995〉年 2 月）等を参照した。

[9] マルティンスの著作として、モラエス関連以外に『南蛮文化渡来記――日本に与えたポルトガルの衝撃』(前出)や亀井俊介・新倉朗子・亀井規子訳『日本文学と西洋文学』(集英社、昭和 49〈1974〉年 5 月)等がある。

[10] モラエスに関する著作として "O jardim do encanto perdido : aventura maravilhosa de Wenceslau de Moraes no Japão" (Manuel Barreira 1954 年)もある。

[11] 当時日本近代文学館の理事長だった伊藤整は、寄贈の式を行うためポルトガル大使館を訪れており、「ポルトガル大使館の話」(『朝日新聞ＰＲ版』昭和 43〈1968〉年 11 月 24 日)には同大使館を二度訪れた時のことが述べられている(『伊藤整全集』第 24 巻、新潮社、昭和 49〈1974〉年 6 月、423 頁）。

[12] 花野富蔵訳『定本モラエス全集』の編集委員は、志賀直哉、井上靖、遠藤周作、Ａ・マルチンス、佃實夫の五名。

[13] 著者の紹介として「アルマンド・マルチンス氏はポルトガル代理行使で、昭和二十七年五月来日赴任、日本文化、ことに能楽に興味をもたれ、その近刊の著書にはポ語による最初の能楽の紹介と、能楽三篇の翻訳とが収められる筈である。モラーエス記念碑の除幕式には主賓とし

て列席されたので、とくに本誌のためにお願いした次第である」と付記されている（『読書春秋』の発行所・春秋会は国立国会図書館内、同図書館製作）。

[14]「モラーエスの徳島」(『読書春秋』5(9)、春秋社、昭和 29〈1954〉年 9 月）、2 頁。

[15]「モラーエスの徳島」前出、2 頁～4 頁。

[16]「日本を見た三つの目　ハーンとロチとモラエス」(下)(『朝日新聞』昭和 40〈1965〉年 2 月 2 日)。

[17]「日本を見た三つの目」(下)、前出。

[18]「モライスと仏教」(上)(『朝日新聞』昭和 40〈1965〉年 9 月 9 日夕刊)。

[19] 中河の経歴については、中河与一『天の夕顔前後』(古川書房、昭和 61〈1986〉年 6 月）や『中河與一全集』第 12 巻(角川書店、昭和 42〈1967〉年 9 月)収録の「年譜」（馬渡憲三郎）、笹淵友一編『中河与一研究』南窓社、昭和 54〈1979〉年 3 月）収録の「年譜」(石附陽子）等を参照した。

[20] 森下節『ひとりぼっちの戦い　中河与一の光と影』（金剛出版、昭和 56〈1981〉年 12 月）を参照。

[21] 中河幹子「彼との生活 (十一)」(『中河與一全集月報 第 9 号』角川書店、昭和 42〈1967〉年 6 月)、7 頁。

[22]「徳島のモラエス」(『自由』7(10)、昭和 40〈1965〉年 10 月)、160 頁。

[23]『天の夕顔前後』前出、28 頁～32 頁。

[24]『天の夕顔前後』前出、33 頁～34 頁。

[25]「徳島のモラエス」では、モラエスに関する事柄について事実誤認も少なくない。副題に「日本に帰化した一ポルトガル文人」とあるが、モラエスはラフカディオ・ハーンとは異なり「帰化」していない。作中モラエスの著書『お米と小春』に言及しているが、「お米というのは神戸時代から愛していた女で、小春はその妹である」（「徳島のモラエス」、『自由』昭和 40〈1965〉年 10 月、163 頁）というように姉妹と勘違いしている（小春はお米の姉の娘で、姪と叔母の関係）。モラエス研究家の花野富蔵についても言及しておらず、中河は花野のモラエス関連の著作（翻訳や紹介記事、伝記類）を読んでいなかったように見受けられる。そうした点でも「徳島のモラエス」に書かれた事柄について、そのまま事実として鵜呑みにできない所がある。

[26] 成谷麻理子「架空訪問記――大正十二年、中河與一はモラエスに会ったのか」(『徳島県立文学書道館　研究紀要　水脈』16、令和 2〈2020〉年 3 月）でも「安部六郎の訪問記、および上野忠夫の編集後記に目を通していた」可能性を指摘しており、「事実を材料として架空の「私」が語るフィクションではないのだろうか」(60 頁)と推察している。

[27]「徳島のモラエス」前出、165 頁～166 頁。

[28] 安部＝入江六郎は、東京外国語学校を大正 13〈1924〉年 3 月に卒業後、ブラジルで外務書記官の職務に就いている。内閣印刷局編『職員録』（昭和 5〈1930〉年 7 月 1 日、26 頁）には、在サンパウロ総領事館で外務書記生として入江六郎の名があり、会田慶佐の名も記されている。昭和 6 年版『職員録』（昭和 6〈1931〉年 7 月 1 日、28 頁）では、在バウルー領事館の外務書記生、昭和 12 年版『職員録』（昭和 12〈1937〉年 7 月 1 日、30 頁）では、サンパウロ総領事館の外務書記生として「入江六郎」の名が確認出来る。

[29] 岡本多希子「戦前におけるモラエス顕彰」(『東京外国語大学論集』42、平成 3〈1991〉年 3 月)、185 頁～186 頁。

[30] 岡本多希子「戦前におけるモラエス顕彰」前出、186 頁。

[31] 安部六郎「ヴエンセスラウ・デ・モラエス訪問記」(『徳島毎日新聞』昭和 10〈1935〉　年 7 月 1 日)。

[32] 花野富蔵訳『定本モラエス全集V』(集英社、昭和 44〈1969〉年 7 月)、261 頁～262 頁。

[33] ちなみにモラエス著／花野富蔵訳『徳島の盆踊』（第一書房、昭和 10〈1935〉年 9 月）では、引用の該当部分（1～2 行目）は「うつとりとしたこの瞳に、ぐつと射しこんだ緑、――うごめくこの鼻にぐつと吸ひこんだ緑。（以下略）」（54 頁）となっている。

[34]「徳島のモラエス」前出、162 頁。

[35] ヴェンセスラウ、デ、モラエス／上野忠夫抄訳「徳島の盆踊」(『東京外国語学校葡萄牙語同学会 会報』2、大正 13〈1924〉年 2 月）、56 頁。

[36] 上野生「編集後記」(『東京外国語学校葡萄牙語同学会 会報』2、大正 13〈1924〉年 2 月)、109 頁～110 頁。

[37] 上野生「編集後記」前出、109 頁。

[38]「徳島のモラエス」と安部自ら邦訳した「ヴエンセスラウ・デ・モラエス訪問記」を比較すると、はじめてモラエスと対面した場面以外にも似た所がある。「徳島のモラエス」では、室内でモラエスと面談している時、仏壇に立てかけてある女性の写真に気づく所や他の外国人との交際の有無についてモラエスに尋ねた時に自ら交際を絶っている状態であった点、母国ポルトガルのことを尋ねると悲痛な面持ちをした点など書かれているが、安部のモラエス訪問記でも似た質問やモラエスの反応が記されている。なお『都新聞』昭和 10〈1935〉年 7 月 4 日の記事として、安部から改姓した入江六郎で「蛍供養――モラエスを忍ぶ――」も掲載されている。同記事にも「筆者が大正十二年八月十六日彼を徳島に訪ねた時、「私は徳島より一歩も出度くない。此所で安住し、此所の土になり度い」と彼は言つた」ことが記されている。

[39]「徳島のモラエス」前出、162 頁。

[40]「徳島のモラエス」前出、167 頁。

[41]「徳島のモラエス」前出、169 頁。

[42]「徳島のモラエス」前出、169 頁。

[43]「徳島のモラエス」前出、163 頁。

[44] モラエスの自宅を訪ねていない中河と作中の「私」を同一人物と見るわけにはいかないが、「私」は作家としての中河の見方、思考を反映した分身的存在といえる。

[45] 中河『孤独地獄』(新生社、昭和 57〈1982〉年 12 月)、69 頁。同書ではブラック・リスト疑惑に対して「戦後に平野謙などから戦争中に文壇人をいぢめたと、ありもしない濡れ衣をきせられて攻撃せられた。これは今までの中で最もひどい中傷であつた」（70 頁）と述べられている。

[46]『夜明けのしらべ　モラエス・その生涯と作品』(五月書房、昭和 44〈1969〉年 12 月)、247 頁。

[47] 中河は戦前『日本の理想』（白水社、昭和 13〈1938〉年 5 月）を刊行しており、同書には「西洋と東洋を包摂するものとしての日本」という評論が収録されていた。戦後の評論「近代はもう終つた」（『日本経済新聞』昭和 33〈1958〉年 1 月 10 日）では「合理主義も、長い間われわれにとつて大切な論拠であつたが、それ以上のものが今日はすでに起こりつつあるといふことを痛感するのである。」と述べている（『中河與一全集』第 12 巻、前出、69 頁）。

[48]「徳島のモラエス」前出、161 頁。